

べからずとして行つてみた。

丸山先生の内筆及參考品として、丸山先生が歐米より携へ歸られた圖案、繪葉書、それに長野で開かれた講習會の成績品が重なるもので、大下先生河合先生のものも二三見受けられた。

此度博覽會へ出陳された夏の光麥焼く夕などもこのとき拜見した、尙かつて『みづゑ』の口繪に出た清境、其外駒鳥洪水の音、夏の野、花野後庭等數十の傑作を拜見して、只もう訝然として其入神の妙に驚き入つたのであつた。

これを拜見して大いに得る處があつたのは勿論であるけれども、それと共に精神的に一種の刺激を受けたのも事實だ。

それから一寸二月ばかり畫をかゝなかつた、驚いて自暴自棄したのではない、大いに活動すべく大いに黙したのである。

さて久しく黙して、將に啼かむとして筆を取つたのが、水彩畫を始めて第一番の戸外寫生だ、つまりそれは展覽會より得たる心の刺激によつて起きたのである。

大膽と言へば大膽、無法と言へば無法。

畫板に貼つた紙は木炭紙の全紙だ、場所は

松尾城の殘壘に立てる杉並木。

日曜の朝飯を匆々に終へて、大なる希望を腦の中で考へて出掛けた。この寫生についての感想は頗る多い、先づ前夜からの用意と希望いよいよ現場へ行つてからの心持、いろいろあるそれは他日に譲る。

丁度正午まで三時間程で、鉛筆の下が描けた、それを家へ持つて來て彩色をする。

毎日二時間乃至四時間位宛かゝつて、一週間ばかりで出來上つた。それがまた頗る氣にいつてたまらない、とうとう額にまで仕立てた。これは今見てもよく思はれる。

それを手始として、烏帽子岳の殘雪（上田の東北方に聳ゆ）冬木立、夕暮の空やたらに、寫生した、爾後寫生と臨畫とかけるがはるやつてゐる。だんだんやつて居る中に腕は上達しないが心は驕つてゐる、先づ第一に紙が氣にくはぬと言ふのでケントをは

づむ、かく紙がよければ色がよくでる、次にワットマンをはづむ、なる程益々よい、次には繪具、繪具も高價なのなら一層よい、こんな鹽梅で、技倆は高くならんが洛陽の紙

價は益々高くなる呵々。

去年四月廿日には、田舎の椋鳥博覽會見物に出掛けた、上野停車場で先づ見えるのが美術館、さあたまらない、翌日は第一番に美術館に舞ひ込むだ、そこでとうとう畫飯もせずに二時頃まで居た。

見物をするところは博覽會のみならず、市内も歩きたい、友人の居所も訪はれねばならん、横濱へも用事がある、それに廿五日には歸らねばならん、そのたしない中から美術館一つに二日を費した。

思ふに自分が畫を描かない時であつたならば、畫なるものに對してこれ程の興味と注意とを拂はなかつたであらう。

自然に對して感興を起し、また畫に對して其審美的境域に遊ぶことが出來得るのは、一に自分流とは云へ畫を習つた賜であると信ずるのである。

小言

草 水 生

○僕は田舎に居るうへ交際はうるさくて大嫌だから友と云ふものは殆んどない、何處

へ行つても一風流者、片意地者として度外視される、其の都度胸のなかく『僕は自然の大なる懷ならでは居るところはない』と諦らめて、みづゑを相手に淋しく暮らして居る。

○みづゑの記事のうち何時讀んでも興味のあるのは、柏亭氏の「我が水繪」パルソンス氏の「紀行談」イースト氏の「寫生談」林忠正氏の「洋畫家への忠告」それから「展覽會の批評」等である、一月號に豫告が出てゐたから鶴首して卅三號を待つた甲斐なくイースト先生の寫生談がなかつたので僕は顔色を失せんばかり失望した。

○初めて他家でコンテの肖像畫なるものを見たとき、濃淡の具合が非度く氣に合つたので家に歸つてから亡き父の寫眞をかいで見やうと思つてコンテの小さな棒と畫紙とを出した、手續などは毛頭御存知なかつたから(今でもよく知らない)なんでも鉛筆と同じだらうと思つてそのまゝコスコスと塗りつけた、けれどもなか／＼うまくゆかぬので、えらいむづかしいものだと思つてやめたことがあつた、後日、友の所で話

したら大笑をされた。

○繪具をもつ資格がないと思つたから、潔く胃を脱いで鉛筆畫を始めたではない、逆戻をした、時は日曜、モデルは福々したオカメの面、位置は、上を向いてゐるのを斜に横から見たところ、餘程精確にかいた積だが僕のは笑つてゐない、試に紙片を以てモデルの丁を蔽ふた、が依然笑つてゐる、次に口、頬にもやつてみた、いづれも結果がおなじであつた、それから下唇を少しなほし、頬を豊かにしたら、やつと似て來た。

○洋傘をスケッチしたとき地の色につり込まれて、陽部も黒くしすぎたので、どこが影だか解らなくなつた、調子と云ふ言葉は何遍も聞いてはゐるが、實際やつて見るとかう云ふ失敗ばかりある。

繪日記

京都 S.

K.

生

一心に『みづゑ』を讀んでゐると、隣の室で皆がくすくす笑つて居る。耳を傾けると、姉の聲で、『之は誰でせう、ホ……君ちやん

だわ、此の可笑しい顔——ホ……』續いて皆が一度に笑ひ出した。ハテと思つたら最後、いつの間にか横に置いた繪日記の姿が見えぬ。

岐阜第一回洋畫展覽會

三月一日岐阜市俱樂部に於て第一回洋畫展覽會を開かる、催主は商工新報社長原眞澄氏にして、當市洋畫界の甚だ振はざるを憤慨し、自から立つて此舉に出づと、好意多とすべきなり。

出品總數大幅小幀約五十點、その多くは水彩畫にして、油畫七點パステル兩三點を見る、出品者の氏名を検するに野崎兼清氏その大部分を占め、他に矢野氏伊藤氏柳田氏等ありき。出品數乃至その實質の如何に係はらず、此舉、當市の人目を惹きたること夥しく、更に第二回を名和昆虫研究所に於て催さんとの企、一部の人々の間に唱へらる、想ふに當市の洋畫界之れより次第に盛んなるものあるべし。(M生報)